

「日本に原発を造れる場所はない」

2024年01月29日

私は大分県で育ったので日本海を見る機会は少なかった。能登半島に行き、日本海を見たいと思っていた。3年前、能登半島を一周する機会を得た。快晴の下、千里浜ドライブウェイを走り、綺麗な日本海を堪能し、北陸電力の志賀原発の傍を通り、白米千枚田の棚田を見て、朝市で有名な輪島を通り抜け、能登半島の先端、珠洲市漁港前の民宿に泊まった。翌日、奇岩の見附島を見て、七尾市を通り、トンネルの多い北陸道を抜けて、N姉の別荘の北軽井沢に戻った。長年の、能登半島で、日本海を眺めるといふ夢が叶った。

この能登半島で、正月元日、大地震が起こった。亡くなった方が二百名を超え、未だに不明の方がおられ、関連死者も増えている。心から哀悼の意を表したい。家屋の倒壊が一万数千戸もあり、火事、地滑り、津波被害が重なっている。道路の破損によって、水、電気、ガスなどのインフラの復旧が遅れ、被災者は大変な難儀を強いられている。一日も早い復興を祈っている。「東京新聞」は22日の朝刊と翌日の「こちら特報部」に、珠洲市高屋地区が「珠洲原発」予定地であったが、反対闘争で建設を阻止した記事を報道していた。高屋地区は住宅の大半が壊れ、海も陸も閉ざされて孤立状態になり、海岸線も数メートルも隆起した。もし、造っていれば、取り返しのつかない大災害に見舞われた。被災した高屋地区にある円龍寺の住職・塚本真如氏は「どこで何があるか分からん。本当に珠洲原発を止めて良かった」と語った。塚本氏は、原発建設の反対運動の中心的な存在であった。1975年に持ち上がった原発建設計画は住民の反対運動と、それを切り崩す電力会社との28年に及ぶ闘争の末、2003年に凍結された。塚本氏は、「あと一年粘られたら、つぶれとったのは僕らの方だった」と、反対運動の日々を振り返り、下記のように語っている。

推進、反対の本を100冊も読み、安全神話は嘘で固められていると疑い、人間と放射能は共存できないと、米スリーマイル島や旧ソ連チェリノブイリ事故から、脱原発が確信になり、反対運動に関与していった。しかし、関電は住民への懐柔に動いた。「タダで飲み食いさせたり、原発視察名目の接待旅行に招いたり、芸能人を呼んでコンサートも開かれた。反対派の店では物を買うなどの不買運動も起きた。塚本氏宅には連日、無言電話があり、盗聴されているとしか思えない手紙も来た。推進派に包丁を突き付けられたこともあった。しかし、「絶対に推進派の個人攻撃だけはするな」と言い続けた。関電は多額な寄付をし、原発予定地に億単位の賃貸料を得た住民もいた。「カネ」の力で一人また一人と賛成に回り、地域は分断されていった。転機になったのが、原発建設に向けた現地調査が始まった時、関電の車列を阻止するため、塚本氏を含めた住民たちが40日にわたって念仏を唱えて座り込み抗議を行った時からである。原発建設予定地を共有化したり、関電株を買って、撤回の株主提案をした。原発に反対する政治家を増やそうと、県議選や市長選などにも加わっていった。父親の「強い者に味方したら坊主じゃない」という教えが後押しした。

市民の立場で脱原発を発信している「原子力市民委員会」は「事業者による活断層評価は明らかに過少評価だった。…社会インフラが機能不全に陥った。原発事故発生時に避難や機材、人材の増強は不可能だと分かった」と発表している。座長を務める龍谷大の大島堅一教授は、「日本は世界にも稀な地震、自然災害大国。現行の規制基準に重大な欠陥があり、避難態勢にも実効性がない。現在稼働している全ての原発を直ちに停止すべきだ」と警鐘を鳴らしている。海底の活断層とその連動調査が不備で、想定外の事態が起こることが判明した。道路が破損し陸での避難、海岸が隆起し海からの避難も困難であることが分かった。「日本に原発を造る場所はない」ということが明らかになったのではないか。